

母をしのぶ

斎藤 フキ子

広報上越で「平和について考えてみませんか」の記事が目に入り、母を思い出した。母が参加していた「防空壕作り」である。集落総出で、必ず一軒の家から一人参加である。カスリモンペが流行していた時代だ。母の格好もそれにながっていた。

ダンボールも、一輪車も無い時代なので、木箱とリヤカーだけが頼りであった。わたしは邪魔にならないように少し離れた土手で作業をするみんなをじっと見つめていた。アリの大移動に見えるくらいであった。列をしっかりと乱さぬように、そしてリズムにのるようにしてみんな動いていたのが私の記憶に強く残っている。

母は昔、体が弱かったと聞いていたが、嫁に来てから、すごく鍛えられたと言っていた。天秤棒で「肥やしかつぎ」なんてやったこともないのに、畑へ行くのにはそれが当たり前、という時代なのだ。天秤棒を担ぐと重みで体の芯がミシミシと音がする。そんな経験は嫁入り前にはしたこともなかったのだ。畑仕事を終えると、這うようにしてやっと土間に到着、そしてゴロリと横になる。つらかっただろうと、しみじみ思う。母の生家は大百姓で、蝶よ花よと大事に育てられ、食には事欠かなかったという。環境が全然違ったのだ。でも自力で苦勞を積んだ体は強い。母は何事に対しても立ち向かう姿勢が芽生えた。四人の子どもたちを何が何でも自分で守らなくては、と。

その頃、父は舞鶴（京都府）で、戦地に向かわれる人たちを次々と見送る仕事についていた。母は、一人でその留守宅を守るために必死だったと思う。

私は、空襲警報が鳴った時のことを今でもよく覚えている。サイレンが鳴ると、一斉に電気を消すか、電灯の周りに黒い布をかぶせ、しっかりと皆で手を握り合って息をこらし時の過ぎるのを待つのだ。恐怖を肌で感じていたから決して忘れることができない。トラウマになってしまう。

戦争が終わってからは、表面上はようやく元に戻ったというものの、体はすぐには慣れなかった。

当初日本が負けるとは皆思っていなかったのだ。

我が家では、大きなローソク立てを三本、蔵から出してきて供出していた。(※1)でも、現実に資源がないのだから、こんな結果になっても仕方のないことである。

戦後になって、広島、長崎に原爆が投下されたのを見た。我々、高校の時「原爆を許すまじ」の歌を何回歌ったことだろう。

今、ウクライナの方たちを、自分のことのように感じ、一刻も早く終止符を、と祈るのみである。我々にできることは何だろう。

私にとって戦争とは、子どもたちを脅かす産物でしかない。何も残らない。残るのは焦土化した土地。平和はお金で買えないのである。体験したからこそ、今の平和の有難さを天に感謝する。

※1 金属類の回収：武器などの軍需生産の原料となる金属類を確保するため、

官民所有の金属類の回収が行われた。